

## ニクラス・ルーマンのコミュニケーション・システム理論の整理 と心理相談への適用の試み

儘田 徹

### Niklas Luhmann's communication system theory and its application to counseling practice

Toru Mamada

本小論では、ルーマンの最晩年の主著における議論を軸に、コミュニケーション・システム理論の最小限の整理を行った。加えて、参加者が最小規模のシステムと考えられる心理相談へのこの理論の適用を試みた結果、次のような知見を得た。①心理相談システムは問題をメディアとし、解決可能/解決不可能の二値コードによりコミュニケーションを観察する機能システムである。また、問題をメディアとしたコミュニケーションでは、問題の観察に用いる形式が情報、来談者と相談員が問題の観察に用いる形式の一致が伝達となり、これが解決可能として理解される。②心理相談システムにおいて、相談員は来談者が問題の観察にどのような形式を用いているのかの観察から始める。そして、問題の観察に用いる形式が自分と一致しておらず、しかもそれがパラドクスの場合には、相談員自身が問題を観察するのに用いたパラドクスのない形式を提示したりする。

キーワード：ニクラス・ルーマン、システム理論、コミュニケーション、心理相談

#### I. はじめに

ニクラス・ルーマンは社会システムをコミュニケーション・システムとして理論化しようとした。しかし、ルーマンの議論はあまりに広範囲に及んでおり、およそ整理・体系化が追いついていないようにみえない。そこで本小論では、最晩年の主著<sup>1)</sup>における議論を軸に、コミュニケーション・システム理論の最小限の整理を行いたい。

また、ルーマンのコミュニケーション・システム理論の構想からみて、この理論はコミュニケーション・システムのあらゆる具体例に適用可能でなければならない。ルーマン自身も具体例への適用を試みており、福祉国家のような参加者の多い大規模なシステムへの適用がよく知られている<sup>2)</sup>。しかし本小論では、この理論の汎用性を強調するために、参加者が二人と最小規模のシステム

と考えられる心理相談への適用を試みたい。

#### II. コミュニケーション・システム理論の整理

以下では、オートポイエティック・システム、構造、観察、コミュニケーション、メディア、意味、システム分化、機能システム、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア、二値コード、構造的カップリング、寄与、統合の各概念を中心に、コミュニケーション・システム理論の簡潔かつ網羅的な整理をめざす。

##### 1. オートポイエティック・システム

システムの構成要素がその構成要素のみから再生産されることをオートポイエーシス、オートポイエーシスによる構成要素の再生産により存続するシステムをオートポイエティック・システムと呼ぶ。主要なオートポイエティック・システムには、人体を含む生命有機体、意識

ないし心、そして社会がある<sup>3)</sup>。

社会の構成要素はコミュニケーションであり、社会はコミュニケーションからコミュニケーションが再生産され続ける限り存続する。それゆえ、社会はコミュニケーションのオートポイエティック・システム（以下システムと略）といえる。また、そのようなシステムには相互作用、組織、全体社会があり、相互作用は居合わせることで相互に知覚できる他者と自分のコミュニケーション、組織はそのメンバーである他者と自分のコミュニケーション、全体社会は可能なすべてのコミュニケーションから成る。したがって、相互作用と組織は一部重複するし、全体社会はすべての相互作用と組織を含む。このほか、メンバーシップが不安定すぎる組織を社会運動と呼ぶこともできる<sup>4)</sup>。

## 2. 構造と観察

システムが存続するにはコミュニケーションの再生産が不可欠だが、これを確実に行う手立てなどないので、コミュニケーションの再生産はただの偶然ということもできる。しかし、そのためにともかく何かをしようというのであれば、それまでのコミュニケーションを参考にして、次のコミュニケーションをそこから大きく外れないようにすることは可能である。

だが、それまでのコミュニケーションを完全に想起することなどできようはずもないし、その必要がないことも容易に想像がつく。コミュニケーションは幼児でさえ可能だし、それを可能にしているのは過去のコミュニケーションに関する完璧な記憶ではなく、多少の語句や用法などを想起できる程度の記憶と考えられるからである。この例における想起可能な語句や用法などのように、可能なコミュニケーションを限定することでそれを方向づけ、次のコミュニケーションを可能にするものを構造と呼ぶ。また、相互に関連する語句や用法などのセットがあれば想起が容易になるが、そのようなセットを心理学の概念を用いてスキーマと呼ぶ<sup>5)</sup>。

加えて、システムがコミュニケーションを再生産するためには、次のコミュニケーションとそれまでのコミュニケーション、あるいは自らが再生産したコミュニケーションとそれ以外のコミュニケーションを区別し、区別されたものの一方を指し示すこと（これを観察と呼ぶ）が可能でなければならない。システムの外部は環境と呼ばれるが、システムは自らと環境の区別を用いることでそうした観察を行うことができる。このように、システ

ムがシステムと環境という区別を用いて観察を行うことを再参入、システムが自らを観察することを自己観察、システムが環境を観察することを他者観察と呼ぶ<sup>6)</sup>。

## 3. コミュニケーションとメディアとしての意味

コミュニケーションは、他者が自分に何らかの情報を伝達し、自分がその意味を理解すること（誤解を含む）で成立し、そのようなものとして観察されもする。もし、他者による伝達と情報の区別が観察されなかったとしたら（例えば立ち聞きでは他者による伝達はたいてい観察されない）、それはコミュニケーションではなく自分の知覚として観察されたことになる。また、ここでは情報を、それまでにない意味をもたらす限りにおいてそう呼ぶが、これによってシステムの構造は見直され変化する。再び語句や用法などを構造とする例でいえば、情報によって構造に新たな語句が加わったり用法が変更されたりするのである<sup>7)</sup>。

このように意味は、コミュニケーションの理解と再生産をつなぐメディアとして、あらゆるシステムで用いられるが、これはメディアと形式の区別によって可能となっている。システムは、コミュニケーションを理解するにしても再生産するにしても構造を想起し、そこから必要な意味を引き出す。つまり構造は、頻繁に改訂される辞書に例えることもできるが、辞書を開けば一目瞭然のように、一つの語句でさえ相当数のさまざまな意味があるため、選択が不可避である。言い換えると、意味は多様であるがゆえにメディアでありうるが（多様でなければわずかなコミュニケーションにしか対応できない）、実際の使用時には限定される。この限定された意味を形式と呼ぶ。こうして意味は形式としてのみ使用されるが、メディアとしての多様な可能性という別の一面を常にともなっていて、これにより必要に応じて異なる形式を使用できる余地を（想起できる限りではあるが）存続させる<sup>8)</sup>。

## 4. システム分化と機能システム

近代社会はさまざまなシステムに分化した複雑な全体社会システムである。近代社会におけるシステム分化の主要な形式は機能的差異にもとづく機能分化だが、古代の氏族社会のような同質的なシステムが空間的差異により分化する環節分化や、中世の身分社会のような階層的差異にもとづく階層分化も健在である。例えば領域国家や科学の専門分野は前者、先進国と発展途上国の不平等

の強化は後者に該当する<sup>9)</sup>。

一方、機能分化したシステム（機能システム）には、政治、法、経済、家族、教育、科学、医療、技術、芸術、宗教、マスメディアといったものがあるが、どれもシステムであることには変わりがないので、上述のシステムに関する議論はすべてあてはまる。しかし、機能の特化にともなって意味のメディアの多様性が限定される可能性が生じるため、一部の機能システムでは象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアが用いられる。ただし、技術、医療、教育といった機能システムは、社会にとっては環境となる人体や意識を直接的に変化させたり、相互作用に大きく依存するため、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアは用いられない<sup>10)</sup>。

#### 5. 象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアと二値コード

「象徴的に一般化された」とは、次のコミュニケーションにおいてもほぼ確実に同様の意味で使用できるということであり、そうであるためにはその可能性を自分が信頼するだけでなく、他者も同様に信頼することを自分が信頼する必要がある。そしてそれゆえに、信頼の不足によるインフレーション、すなわちコミュニケーション・メディアの過小評価の可能性を少なからずともなうことになる。そうしたコミュニケーション・メディアの典型としては、経済における貨幣、政治における権力、科学における真理、家族における愛といったものがあるが、例えば権力は政治的公約の過剰、愛は表現描写の過剰により過小評価されがちである。また、こうした機能システムのコミュニケーション・メディアは、それぞれ貨幣、権力、真理、愛という限定がある一方で、例えば関係する事象や人物、時点などの可能性については多様なままである<sup>11)</sup>。

さらに上述のように、システムがコミュニケーションを再生産するには、自らが再生産したコミュニケーションとそれ以外のコミュニケーションを、観察により区別できなければならないが、その際に二値コードが使用されるのも機能が特化した機能システムならではの。例えば経済であれば所有/非所有にもとづく支払う/支払わない、法であれば適法/違法、科学であれば真/偽がそれぞれの二値コードであり、当該コードに関わるコミュニケーションの再生産は生じやすく、当該コードに関わらないコミュニケーションの再生産は生じにくい構造が形成される<sup>12)</sup>。

一方、二値コードはそれ自体としては二値のうちのどちらを選択するかの基準にはならない。このため、例えば科学的なコミュニケーションの内容が真か偽かは理論と方法、法的なコミュニケーションの内容が適法か違法かは法規と手続きにもとづいて判断する必要がある。こうした科学における理論と方法、法における法規と手続きのように、二値コードのどちらを選択するかの基準となるものをプログラムと呼ぶ。ただし、例えば科学が偽のコミュニケーション、経済が支払わないコミュニケーションばかりを再生産するようになってしまったら、当然のことながら最終的には科学や経済のシステムは崩壊してしまうだろう<sup>13)</sup>。

#### 6. 構造的カップリング、寄与、統合

機能システムはもちろん機能的には分化しているが（そうでなければ機能システムとはいえない）、構造的カップリング、寄与、統合といったかたちで相互に関係してもいる。このうち構造的カップリングとは、ある機能システムで再生産されるコミュニケーションの一部が、別の機能システムで不可避的な関心事になる（刺激とか攪乱と呼ばれる）ような関係のことである。

例えば法システムにおける当該選挙の一票の格差は違憲というコミュニケーションは、政治システムの不可避的な関心事となる。もちろんだからといって、直ちに選挙制度が改革されるとは限らないが、少なくとも政治システムの構造においては、選挙制度改革を想起しやすくなるような手直しが行われるはずである（関連するコミュニケーションの再生産のたびに、それが強まるようならポジティブ・フィードバック、弱まるようならネガティブ・フィードバックということになる）。そしてそのような手直しにともなって（そのたびに）、関心事とはならない圧倒的多数のコミュニケーションへの無関心も強化される。このために機能システムは他の機能システムに無関心になりがちなのである<sup>14)</sup>。

次に寄与とは、機能システムが観察を介して他の機能システムに寄与するという関係であり、例えば教育システムが経済システムを観察し、雇用されやすいスキルを教育するといったことである。しかし、観察して教育しているうちに別のスキルが重要となる可能性もあり、多くを期待することはできない<sup>15)</sup>。

そして統合だが、例えば議会への政府予算案の提出という政治的コミュニケーションが、特定の株式を買うという経済的コミュニケーションにつながるというように、



機能システムの自由度が別の機能システムによって制限される関係のことである<sup>16)</sup>。

各機能システムへの参加は、システム内の組織への参加を介さなければ自由である。しかし、参加の継続（包摂と呼ばれる）を保証する措置は、経済システムへの参加を継続するための生活保護など、人権に関わる最小限のものにとどまるか、それすらも利用できないかもしれない。そして、参加の継続が不可能となることを排除と呼ぶ。

さらに、例えば失業・貧困化による経済システムからの排除にともなって、医療システムへの参加を断念せざるをえなくなるといったように、ある機能システムからの排除が別の機能システムからの排除を生じさせることがある。これも、機能システムの自由度が別の機能システムによって制限されるという意味で、統合と呼ぶことができるだろう。このような排除にともなう統合は、構造的カップリングにより強化された他の機能システムへの無関心から生じる事態といえるが、マスメディアや科学といったシステムは、機能システムを含むあらゆるシステムに関心を持つ可能性があるので、この事態に関心を持つこともあるかもしれない<sup>17)</sup>。

### III. コミュニケーション・システム理論の心理相談への適用

本小論でコミュニケーション・システム理論を適用する具体例は、その実践者がナラティブ・セラピーないし織物療法と呼ぶ心理臨床の一事例である。しかし、彼ら自身が明記しているようにこれらの呼称は安定性を欠くのと<sup>18)</sup>、民間の心理相談所という組織での事例なので、本小論では心理相談システムという仮称を用いることにする。

心理臨床という来談者と相談員の相互作用が心理相談システムの根幹なのは自明だろう。そして、このように相互作用に大きく依存する機能システムならば、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアは用いられないはずである。また、議論が複雑にならないように他の機能システムとの関係は扱わないため、理論の適用にあたっては、構造、観察、コミュニケーション、メディア、二値コードといった概念を主に用いることになる。

以下では、まず心理相談システムとそこでのコミュニケーションを仮説的に定義し、さらにこの定義のあてはまり具合を確認しつつ事例を検討するというかたちで議

論を進める。このうち前者については、ルーマンの教育システムとそこでのコミュニケーションに関する議論が役立つ。

ルーマンによれば、教育システムは経歴をメディアとし、優/劣の二値コードによりコミュニケーションを観察する機能システムである。また、経歴をメディアとしたコミュニケーションでは、経歴に必要な知識という形式が情報、経歴に必要な知識という形式の提供と獲得が伝達となり、これが優れた成果として理解される。さらに、教育は教育者による知識の伝達として認識されることから、伝達可能/伝達不可能という二値コードの使用も可能である<sup>19)</sup>。これをふまえて、心理相談システムとそこでのコミュニケーションを、仮説的に次のように定義することができる考えた。

心理相談システムは問題をメディアとし、解決可能/解決不可能の二値コードによりコミュニケーションを観察する機能システムである。問題をメディアとしたコミュニケーションでは、問題の観察に用いる形式が情報、来談者と相談員が問題の観察に用いる形式の一致が伝達となり、これが解決可能として理解される。

事例の来談者は二十代後半の女性であり、心理相談ではまず、学歴主義の父親とそれにしたがうばかりの母親のもとで、自分は生活や進路を厳しく束縛されたのに弟は自由に育てられ、それを不満に思いながらも両親の意向にしたがってきたことで、とくに父親に不信感や恨みがある旨が語られた<sup>20)</sup>。ここで、コミュニケーション・システム理論を適用して検討すべきと考えられるのは、来談者が問題をどのような形式を用いて観察していると相談員は観察しているかである。

上記の来談者のコミュニケーションに続く相談員のコミュニケーションは、「それはずいぶんなお父さんねえ。」それに続く来談者のコミュニケーションは、「そうなんですよー。私なりに考えて、一生懸命やっているつもりなのに、全然認めようとしなくて……。」というものだった。このことから推測すると、来談者は問題を自分の生活や進路を父親に束縛されたという形式を用いて観察している、と相談員は観察しただろうし、次の来談者のコミュニケーションによって、問題の観察に用いる形式が一致したと観察したはずである。そして、相談員は来談者に最近その形式を用いて観察したことを語るように、いちいちあしろこうしろといわれているのかなどと問いかけている<sup>21)</sup>。

来談者も、問題の観察に用いる形式の一致を観察した

かもしれないし、少なくともコミュニケーションが円滑に進んでいることに手応えを感じたに違いない。そして問いかけに対し、父親からああしろこうしろとはいわれなくなったが、いちいち予定をしつこく聞かれたり、外出や帰宅のたびに行き先を聞かれたり、遅いと文句をいわれたり、自宅の居間の隣室が自営業の父親の事務所で、居間に頻繁に出入りして行動を監視されている感じがしてうっとうしいこと、それでもがまんできてしまうところがよくないかと思ったり、父親に文句をいっても母親を経由して自分に返ってくるので、どうしたらよいかわからないこと、父親のことで母親に文句をいうと、お父さんはああいう人だから、あなたのほうが大人になってかわいそうな人だと思うようにいわれ、そう思おうとしたが思い切れないことなどを語っている<sup>22)</sup>。

ここで相談員は、来談者が問題の観察に父親によるさまざまな束縛という形式だけでなく、束縛する父親はかわいそうな人であり、そう思うことが大人になることだと母親の発言にしたがおうと思いつつ、そう思い切れないという形式も用いていることを観察したはずである。しかし、この形式がパラドクスであることから、相談員は来談者にそれをどう思うかを問いかけ、母親がなぜそんなことをいったのか自問自答する来談者のコミュニケーションの後、相談員は自分がこの問題を観察するのに用いたパラドクスのない形式を提示する。それは、母親がなぜそんなことをいったのかはよくわからないが、基本的に両親の問題なのだから来談者がわかってあげる必要はなく、来談者の問題はそれとばっちりをくったことであり、これをどうするかを自分で考える必要があるというものだった<sup>23)</sup>。

来談者は、両親の問題なのだから両親に何とかしてもらいたいが、そうなりそうな見通しはないという<sup>24)</sup>。そこで相談員は、自分が想起する大人(オトナ)/非大人(コドモ)、そしてそれとは異なる親/子の区別を、来談者も使えるかどうか試すことを決断したのではないかと推測される。来談者も使えればシステムの構造が変化し、この変化がその後のコミュニケーションにも反映されるはずだからである。

このため相談員はまず、来談者が大人(オトナ)になることで、自分で自分が生きやすいようにできる力を身につける必要があると指摘するが、おそらくは相談員も予測したとおり、これを聞いた来談者が想起したのは母親の発言だった。来談者の次のコミュニケーションは、父親をかわいそうな人と思うことが大人になることなの

かというものだったのである。そこで、相談員はこれを強く否定したうえで、わがままをかわいそうと思って聞いてあげるのは小さい子に親がすることで、大人(オトナ)になるとは例え両親でも周囲の人に振り回されず、そのうえで折り合えることは折り合えるようになることだと指摘している<sup>25)</sup>。

こうして、システムの構造において大人(オトナ)/非大人(コドモ)、親/子が区別され、来談者と相談員のコミュニケーションの再生産に活かされるようになっていく。長くなるが具体的な理解のため、それ以降の来談者と相談員のコミュニケーションを引用しておく<sup>26)</sup>。

来談者「あーそーかー。かわいそうだと思ってあげるのは親のすることなんだー。母が『大人になって』っていうから、大人だと思ってたー。じゃあ、大人〔オトナ〕のすることっていうのはどんなふうになるんですか？」

相談員「例えば、お父さん〔親〕が『好きなことばかりしてどうするんだ!』って言ったら？」

来談者「うん。」

相談員「それはあなた〔親〕のお考え。私〔子〕には私の考えがある。参考として、いただいております。ご忠告ありがとうございます。以上。」

来談者「えー、かっこいい!……じゃあ、今私がやることって、まだ子ども〔コドモ〕なんだー。」

相談員「そうだね、お父さんお母さん〔親〕なんとかしてよーっていうことだもんね。でも、気持ちは分かるよ、今までが今までだったし、そういう気持ちになるのも無理もないことだと思うし。それで何とかならそうなら、それはそれでいいと思うし〔後略〕」

来談者「いや、今先生がおっしゃるのを聞いてたら恥ずかしくなってきました。私ってホント子ども〔コドモ〕だったんですね。今まで大人〔オトナ〕っていやなもののように思ってたんですけど、先生のお話聞いてたら、そうなれたらいいなああって思います。」

相談員「そう? じゃあ、ちょっとやってみる?」

来談者「うん、やってみたいです。どんなふうに気持ちとか、自分の考えみたいのを持っておいたらいいか、もう少し教えてほしいんですけど……。」

相談員「あー大人〔オトナ〕のコツはねえ、まずはや

たらと感情的にならないことよ。自分にとって必要なことかどうかを冷静に判断して、よけいなことに首を突っ込まない。」

来談者「そうすると、父〔親〕がなにか言ってきた、いやっ！とか、どうしてわからないの！とか感情的にならないで、冷静に答える。」

相談員「あるいは、冷静に無視する。」

来談者「うわー無視するのもありですかー、すごいなー。」

事例ではこの後さらにコミュニケーションが続き、父親を人間ではなく留守番電話に見立てて、その対応マニュアルを作成することになる<sup>27)</sup>。しかしこの引用部分だけでも、大人(オトナ)/非大人(コドモ)、親/子の区別を来談者、相談員の両者が使えるようになることで、両者とも問題の観察に用いる形式の一致を観察しているだけでなく、これを解決可能として理解していることは容易に推測できるだろう。

こうしてみると、心理相談システムにおいて相談員はおそらく、来談者が問題の観察にどのような形式を用いているのかの観察から始めるのである。そこから先は、あくまでもこの事例だけという可能性を否定できないが、問題の観察に用いる形式が自分と一致している場合には、それをもとにコミュニケーションを再生産し、一致しておらず、しかもそれがパラドクスの場合には、相談員自身が問題を観察するのに用いたパラドクスのない形式を提示したり、パラドクスを生じにくい区別を来談者も使えるか試したりするのだと推測できる。ここまで明快になれば、こうした実践を技法として広く共有することが可能になるかもしれない。

#### IV. 結 論

本小論では、ルーマンの最晩年の主著における議論を軸に、コミュニケーション・システム理論の最小限の整理を行った。加えて、参加者が最小規模のシステムと考えられる心理相談へのこの理論の適用を試みた結果、次のような知見を得た。

心理相談システムは問題をメディアとし、解決可能/解決不可能の二値コードによりコミュニケーションを観察する機能システムである。また、問題をメディアとしたコミュニケーションでは、問題の観察に用いる形式が情報、来談者と相談員が問題の観察に用いる形式の一致

が伝達となり、これが解決可能として理解される。

心理相談システムにおいて、相談員は来談者が問題の観察にどのような形式を用いているのかの観察から始める。そして、問題の観察に用いる形式が自分と一致している場合には、それをもとにコミュニケーションを再生産する。しかし、形式が一致しておらず、しかもそれがパラドクスの場合には、相談員自身が問題を観察するのに用いたパラドクスのない形式を提示したり、パラドクスを生じにくい区別を来談者も使えるか試したりする。さらにこのような知見により、こうした実践を技法として広く共有することが可能になるかもしれない。

#### 文 献

- 1) ニクラス・ルーマン, 馬場靖雄, 赤堀三郎, 菅原謙, 高橋徹(訳): 社会の社会. 法政大学出版社, 2009 (以下社会の社会と略).
- 2) ニクラス・ルーマン, 徳安彰(訳): 福祉国家における政治理論. 勁草書房, 2007.
- 3) 社会の社会: 33-35, 59-60.
- 4) 社会の社会: viii, 85-86, 88-89, 140, 177, 1108-1109, 1143, 1160-1161.
- 5) 社会の社会: 34, 113-115, 494, 500; ニクラス・ルーマン, 村上淳一(訳): 社会の教育システム. 東京大学出版会, 2004 (以下社会の教育システムと略): 17; ニクラス・ルーマン, デイルク・ベッカー(編), 土方透(監訳): システム理論入門: ニクラス・ルーマン講義録1. 新泉社, 2007 (以下システム理論入門と略): 115-118.
- 6) 社会の社会: 34-35, 63-65.
- 7) 社会の社会: 67-69, 73, 82-83; システム理論入門: 74-75; ニクラス・ルーマン, デイルク・ベッカー(編), 土方透(監訳): 社会理論入門: ニクラス・ルーマン講義録2. 新泉社, 2009: 265-266; 長岡克行: ルーマン/社会の理論の革命. 勁草書房, 2006: 217-218, 289-290; クリスティアン・ボルフ, 庄司信(訳): ニクラス・ルーマン入門: 社会システム理論とは何か. 新泉社, 2014 (以下ニクラス・ルーマン入門と略): 80.
- 8) 社会の社会: 44-45, 218-222.
- 9) 社会の社会: 905-908, 1049-1050, 1066.
- 10) 社会の社会: 441-447, 467-468.
- 11) 社会の社会: 434-438, 448-449; ニクラス・ルーマ

- ン入門：99-101.
- 12) 社会の社会：405-411, 415；ニクラス・ルーマン入門：156-158.
- 13) 社会の社会：427-428.
- 14) 社会の社会：1068-1076, 1082.
- 15) 社会の社会：1046-1048.
- 16) 社会の社会：895-898.
- 17) 社会の社会：926-930, 1139-1140, 1432-1435.
- 18) 高橋規子, 吉川悟：ナラティヴ・セラピー入門. 金剛出版, 2001 (以下ナラティヴ・セラピー入門と略)：3-6.
- 19) 社会の教育システム：70-71, 87-88, 120-131.
- 20) ナラティヴ・セラピー入門：97-98.
- 21) ナラティヴ・セラピー入門：98.
- 22) ナラティヴ・セラピー入門：98-99.
- 23) ナラティヴ・セラピー入門：99.
- 24) ナラティヴ・セラピー入門：99-100.
- 25) ナラティヴ・セラピー入門：100.
- 26) ナラティヴ・セラピー入門：100-101, [ ] 内は引用者.
- 27) ナラティヴ・セラピー入門：101-102.